

「性の理論」と「死の理論」の統合（3）

密教学科 聴講生 金谷利治

はじめに

「性の理論」と「死の理論」の2つの理論は、インド仏教の最後を飾る『時輪タントラ』において統合される。本レポートでは、後期密教の性と死の理論が、『時輪タントラ』においてどのように統合されたのかを、田中公明の研究¹をもとに見ることにしたい。

『時輪タントラ』とは

『時輪』は、『秘密集会』を中心とする父タントラ、『ヘーヴァジュラ』『サンヴァラ』などの母タントラを統合する不二タントラといわれ、インド密教の発展の最終段階に位置している。すなわち、死を仮想体験する「空」のヨーガと性快感を極大にまで増大させる「楽」のヨーガを統合したのである。

「時輪」（カーラチャクラ）という語が「時間の輪」を意味するように、この体系は時間的周期を重視した。そして「時」の教義は、「外・内・別の三時輪」（トゥンコル・チナンシェンスム）に要約されるといわれる。このうち「外の時輪」とは、その第一章「世間品」に説かれる天文宇宙論を指し、「内の時輪」とは第二章「内品」に説かれる身体論と生理学説、そして「別の時輪」は、第三章以下に説かれる『時輪タントラ』独特の曼荼羅と生起、究竟の二次第の体系を意味している。

『時輪タントラ』は、宇宙論と生理学説をパラレルに論じ、マクロコスモスとミクロコスモスの対応関係を、時輪の曼荼羅に描かれる六尊の仏を中心とするシステムによって解釈したのである。生理的な周期が「内の時輪」として、しばしば言及されるが、最も重視されたのが、輪廻転生のサイクルである。そこでは、生と死と中有と受胎を輪廻転生の四局面ととらえ、これに四つのチャクラを配当する。またこの四局面を、四つの仏身に配当するのが、『時輪』の特徴である。

『時輪タントラ』は、究意次第において、「六支瑜伽」と呼ばれる体系をもっている。①抑制(ブラティアーハーラ)、②禅定(ディヤーナ)、③止息(プラーナーヤーマ)、④総持(ダーラナー)、⑤憶念(アヌスマリティ)、⑥三摩地(サマーディ)の六支であり、それぞれは、曼荼羅を構成する六仏に配当される。それぞれ、毘盧舎那、阿弥陀、宝生、不空成就、阿閼、金剛薩埵である。

次第の流れは、次のようなものである。まず①抑制では、「風」が制御され生命活動が収束する。『時輪』の究意次第では、夜のヨーガと昼のヨーガの十種のヴィジョンが、早くもこ

¹ 田中公明、『超密教時輪タントラ』、1994、東方出版

の段階で出現する²。そして②禪定では、これらのヴィジョンがますます堅固になり、究竟次第の実践にはかかせない脈管系が浄化されるといわれる。そして③止息では、「瓶瑜伽」により、「風」がいよいよアヴァドゥーティーに流入しはじめる。そして④総持からは、中央脈管に流入した「風」が脈管内に保持されるといわれる。そして『秘密集会』の究竟次第における「風」の「不壊の点」への流入に相当する段階が、⑤億念である。しかし『秘密集会』では、心臓のチャクラの中心にある「不壊の点」のみが重要な意味をもっていたが、『時輪タントラ』では、前述の輪廻の四局面に対応する四つのチャクラに、四つの「点」を設定する。これは『秘密集会』の「聖者流」より、「ジュニャーナパーダ流」や母タントラに近い設定である。

そしてこの段階になると、印と呼ばれる女性パートナーとの性的ヨーガによって「チャンドーリーの火」が燃えあがる。『秘密集会』「聖者流」ではすでに「五次第」の前段階である定寂身次第で「チャンドーリーの火」が説かれたが、『時輪』では第五段階ではじめて導入されるのである。そして「チャンドーリーの火」は、覚醒時の意識を司る「大楽輪」の菩提心を浴融させる。そして浴融した菩提心は、中央脈管の中を下降し、生殖器の基底部に触れると「不変の楽」(アクシャラスカ)あるいは「俱生歓喜」(サハジャールナダ)が体験されるが、これは『時輪』においては究極的な境地ではなく、最終段階の入口にすぎない。

『時輪タントラ』の究竟次第では、快楽の増進に伴って、白い菩提心つまり精液は水滴状となってアヴァドゥーティーの中を生殖器の基底部から上昇するのに対し、赤い菩提心つまり血液は頭頂から下方のチャクラに下降するとされている。この場合、下のチャクラで発生した低次の快感が次第に上のチャクラに波及し、四歓喜つまり①歓喜→②最勝歓喜→③離れ歓喜→④俱生歓喜という四段階に高められるとするのが通説だが、逆に上部のチャクラで発生した楽が、下部のチャクラへ下降すると考える説もあった。

そして最後の⑥三摩地に至ると、白赤の菩提心が二万六千〇〇滴積み重ねられて、中央脈管が満杯となる。すると身体の中の四つの「点」は仏の四身に転化し、行者の身体はアルケミー的(錬金術的)な変容を遂げて成仏するとされている。

そこで『時輪タントラ』では、究竟次第の実修によって仏に変容した身体を「空色身」または「虹身」、極大にまで高められた快感を「最高の不変大楽」(パラマールクシャラスカ)と名づけ、両者の双運を究極の位とする。

そしてその境地を象徴するものこそ、「空」を体現した主導カラーチャクラと「楽」そのものである神妃ウィシュヴァマターの父母仏にほかならないといわれる。

このように『時輪タントラ』の究竟次第は、父タントラ系の「空」つまり臨死体験をシミュレートしたヨーガと、母タントラ系の「楽」すなわち性快感を極大に高めるヨーガを折衷し

²前の四種は「夜のヨーガ」、後の六種は「昼のヨーガ」と呼ばれた。このうち「夜のヨーガ」のヴィジョンは、『秘密集会』の「五相」と同じく①煙、②陽炎、③蜃の光、④灯明、⑤常光明となっている(第一と第二のヴィジョンが入れ替わっている)

た構造をもっている。そして『時輪』は、父タントラ系の「空」を先に置き、母タントラ系の菩提心の上昇と下降のヨーガは後に修するという方法で、父母タントラの生理学的ヨーガを、一つの実装階に統合したのである。

この折衷方法は、インド密教の歴史的発展順序を反映するものであったが、事実上、母タントラを父タントラの上に置くものとなっていた。そこで後にチベットで、『秘密集会』の「聖者流」を最高に位置づけるゲルク派の密教教学が成立すると、この解釈は議論を呼ぶことになった。